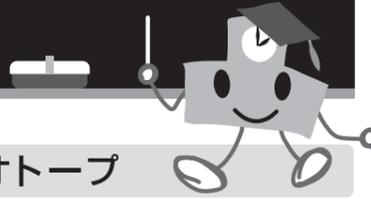


小学校の事例 東区 美香保小学校

キアゲハやカエルを育て、放す。生物と責任をもって関わる心を育むビオトープ。

生命の大切さ、生物のつながりを学ぶビオトープ。地域住民の憩いの場としても活用され、生物多様性を学べる場に。



はじめに 補助金の積極的活用で誕生したビオトープ

本校には、平成15年度に文部科学省の「理科大好きスクール」事業の一環として企画し、その補助金の適用を受けてつくられたビオトープがある。教職員や教育大学の方々とともに、かつては鯉を育てていたコンクリート製の池に土や草などを入れ、池や沼地のような環境を作った。そして、水中生物を放すなどの整備をしながら現在に至っている。



校舎にとけこむ「ビオトープ」

内容 採取した幼虫を家庭で育て 成虫は自然環境で観察

本校のビオトープは、市内には数少ない立入禁止区域を設けていない作りである。子供たちや地域住民が気軽に訪れ、木や草、池の生き物などを間近で観察したり、手に取ることが可能である。

5年ほど前から、ビオトープの周りに自生しているミツバに、キアゲハが産卵に来るようになった。自然のままでは地バチに寄生されてしまうことが多いため、子供たちが幼虫を虫カゴに保護、食草を与えて育て、成虫になった時にはもとの野草に放すなどをしている。

また、札幌市内の山奥から採取してきたアマガエルの卵を放流しており、自然産卵されたトンボの卵とあわせて成長する過程をじっくり観察することができる。

子供たちは卵から成長した「おたまじゃくし」を家庭にもち帰って育てたり、カエルになったものを池に戻して観察を続けたりと、責任をもって生物を育てることを学び、生命を大切にしつつ、生き物とふれあうことを実感している。



発生する「ウマノミツバ」

今後 地域と住む方とふれあえる場所に

ビオトープにより、子供たちは生き物や植物の存在を身近に感じ、広い意味での環境への興味を育てている。

誰でも観察できるビオトープは、地域の方々の学びの場にもなっている。時には学校の近くに住む小さい子どもが、母親と一緒に「おたまじゃくし」を取りに来ることもある。学校に入学する前の子供たちにとって、学校が身近に感じられる機会が生まれている。

教科以外の学習は、キャリア教育、人権教育などたくさんあり、環境教育に配当できる時間や予算にも制限があるが、前出の「理科大好きスクール事業」、経済産業省資源エネルギー庁が支援するエネルギー教育実践校などの取組に積極的に参加し、補助金を得ることも一つの方法と考えられる。



「池」を「ビオトープ」に



ビオトープの「水生植物」

広げよう
つなげよう
環境学習の輪

実施校から
メッセージ

ビオトープは、幼虫を増やすために草を育てたり、冬は水位を少なくしたりなどの管理も必要です。これから始める場合は、2~3年かけて整備するつもりで進めていく方がよいと思います。

本校での生徒と先生の共通意識は「無理なく続けられるようにする。自分で考え、苦しくならないようにしよう!」です。「エコ」は「忍耐」ではないと位置付け、楽しく取り組んでいます。